

治療に活かす核医学の技 —創薬からTheranosticsまで—

松田 博史

Matsuda Hiroshi

((国研) 国立精神・神経医療研究センター 脳病態統合イメージングセンター)



“治療に活かす核医学の技—創薬から Theranostics まで—”は2018年11月15～17日に沖縄県宜野湾市で開催される第58回日本核医学会学術総会・第38回日本核医学技術学会総会学術大会のメインテーマです。種々の画像モダリティの中で、昨今、核医学の役割が大きく見直されてきています。その理由としては、核医学におけるトレーサの集積機序が生理的及び生化学的根拠に基づいており、他のモダリティに比べ治療により関連することが挙げられます。特に分子イメージングの分野では、核医学機器の進歩も相まって他のモダリティの追随を許さず、創薬や治療薬の治験において必須のモダリティとなっています。また、昨今では、DiagnosisとTherapeuticsを融合したTheranosticsという新たな造語も生まれ、核医学による診断と治療が直結した分野が発展してきています。本大会では、この方面の欧米の著名な研究者による特別講演やシンポジウム、並びに教育講演を大きく取り上げます。既に、一般演題も両方の学会で600題を超える応募があり、PET・SPECTによる臓器イメージングのみならず創薬や内用療法に関しても多くの演題が集まっています。一般演題はすべて電子ポスター形式とし、事前に発表スライドをアップロードしていただきます。このことにより、学会に登録された方は、すべての一般演題の発表をご自身のパソコンやスマホ、タブレット等で学会期間中いつでもどこでもご覧になることができます。また、電子ポスターとはいえ、口演発表も多くの方にさせていただきますので、質疑応答も従来の一般口演どおり行います。

昨今、アジア地域での核医学の発展にはめざましいものがあり、アジアの研究者がアクセスしやすい沖縄を開催地として選ばせていただきました。なお、11月17～19日までの3日間、台北で開催される東アジア核医学会とのジョイントシンポジウムも企画されています。東アジア核医学会は、従来の日中韓核医学会が東アジア地域に発展したものです。このジョイントシンポジウムでは、アジアにおける脳核医学というテーマで、認知症、運動障害、脳血管障害、てんかんへの核医学の応用に関して台湾、中国、韓国、タイ、日本の若手研究者からの発表が予定されています。日中核医学交流会も今年で第5回を迎えることから、記念大会が計画されています。今後、日本核医学会総会及び日本核医学技術学会総会学術大会はアジアにおける核医学研究者が集う重要な会議として位置付けられていく必要があります。そのためには発表言語も英語に移行していかなければなりません。本大会では抄録の約半数が英語となり、シンポジウムもその半数が外国人研究者の加わる英語セッションとなっています。また、発表スライドもほとんどが英語となっています。アジアの研究者は普段から英語に接する機会が多く、英語による発表にも慣れてしています。日本人の研究者も英語による発表にますます慣れていただくために、若手研究者向けの英語プレゼンテーション講座を大会中に行うことにしています。

学術総会の予定されている11月中旬は沖縄においてようやく秋になり、湿気も少なく行楽には最適の気候です。11月ならではの沖縄の魅力がたっぷり詰まった観光スポットも堪能されながら、学術総会にご参加いただければ幸いです。